

第7回 「日本語大賞」

テーマ「^{わたし}私が^{つか}使いたい^{ことば}言葉」



高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

月が綺麗ですね

東京都

和光高等学校

2年

影山 琴音

月が綺麗ですね

東京都 和光高等学校 二年
影山 琴音（かげやま・ことね）

「夏目漱石はアイラブユーを月が綺麗ですねと訳した」。有名な話ではあるがこの話を初めて聞いた時、何が言いたいのか全く分からなかった。月が綺麗なだけでなぜアイラブユーになるのか、その意味が分かってからというもの、日本語が美しくして仕方がない。きっと世界で一番美しい言語だろう、とまで思う。日本の人口が一億三千万人ならば、一億三千万通りの「アイラブユー」があるのだ。

さらに面白い言葉がある。「月が綺麗ですね」の意味を知ったぐらいの時、祖母が私に好きではない人に言う言葉は何か知ってる？ と問うてきた。私は分ならず首を横に振るとにっこりと笑って「月は綺麗ですね、よ」と言った。私は思わず笑ってしまったと同時に本当に日本語はすごいと思った。「文字しか変わらないのに反対の意味にしてしまうとは。「じゃあふられた時は月が綺麗でしたになるのかな」と私が言うと祖母は涙を流して笑ってくれた。

日本語のすごさは字におこした時に表れる。「愛してる」「あいしてる」「アイシテル」。全て同じ意味、発音である。それなのに不思議とその言葉の裏にある背景が全て違って見える。漢字にするか、ひらがなにするか、カタカナにするか、はたまたローマ字にするか。それをあえて選ぶことで、たくさん効果が得られる。アイラブユーを月が綺麗ですねと訳してしまうような素直さに欠けて遠回しに言うことを好む日本人にぴったりの言語だと思う。

英語をカッコいいという人もいる。確かにオシャレな言い回しが多かったり、大人びてる感じがしてカッコいいと思う。しかし、私はこうも思うのだ。英語の真のカッコよさというのは日本語に和訳した時にあるのだと。月が綺麗ですねというのもそうだし、文学においてもそうだ。訳し方によって世界観や色が変わるし、英語では一つしかない言い方を日本語で何通りもの言い方に変える。それは人によって違うし、同じ文でも漢字を使うか、ひらがなを使うかによってまた文が違ってくる。だからこそ訳すことを仕事にしている人というのはすごい。同じ本を読んでみても、訳す人が違えば話が少し違ってみえたり、心情も違ったりしてくる。だから好きな訳者さんを見つけるとつい英文の本も買ってしまう。「この英文をこう訳したのか」と確認したくなるほど惚れてしまうのだ。

そんな日本語に惚れてしまった私は声優という仕事に憧れを抱くようになった。声優の仕事というのは言葉を、日本語を操る。日本語の美を自分の想像から、自分の色に、形に創りあげることができるのだ。そんなステキな仕事はそう他にない。だから私は文を読む

ことに対して、たくさんの「こだわり」がある。たとえば、出てきた単語の意味を調べて意味を説明できないものをなくす。それも難しい単語だけではなく、身近にある単語もある。意外と口では説明できないものが多かったからだ。そんな面倒なことであっても日本語を伝える立場として、日本語を軽率なものにしてはいけないと私は考える。言葉にはナイフよりも鋭い刃があり、ダンプカーよりも重さがある。さらに日本人はこの言葉にはこんな裏の意味が込められているのでは、と得意の遠回りで考えすぎるところがある。そんな日本人に思っている通りの日本語を伝えるには、やはり伝える側の慎重さが必要となってくるだろう。人を生かすのも言葉、人を殺すのも言葉である。声優という仕事にはある意味、人の生死がかかっているとも言えるだろう。

こんな日本語の美しさに惹かれ、虜となって、日本語を扱った仕事に就きたいと思った。やはりそれだけの力が日本語にはあり、また惹かれていく。なんとなく、自分が日本語に溺れているような感覚を覚える。そんな日本語に、「月が綺麗ですね」と声をかけたいと思うのだった。